

# 丹波<sup>むとべ</sup>六人部荘における土器様相

—原型・模倣型の視点から—

伊野近富

はじめに

京都府の丹波山地の中には、狭長ではあるが福知山盆地が形成されている。この盆地の南西部は兵庫県側から流れる竹田川と、京都府を流れる土師川<sup>はづ</sup>が合流し、少し広い平野部を形成している。このあたりには、かつて六人部荘があった。現地名は京都府福知山市上六人部、中六人部、下六人部である。

本稿は、古代末～中世の土器様相を六人部荘という地域に限定して把握しようというものである。その際、原型・模倣型という概念で分析する。これによって、この時期のこの土器群は、荘内で自立していたわけではなく、他地域との交流によって構成されていたことを明らかにしたい。

## 1. 六人部荘<sup>(注1)</sup>について

六人部荘が文献に初めて現われるのは大治3(1128)年で、これは平資基が父資孝の私領である六人部荘を、信濃守某に譲渡しており、少なくとも12世紀初めには立荘されていたことが知られる。

これ以前には『和名抄』に六部郷<sup>むとべ</sup>とある。また、奈良時代初期の兵庫県山垣遺跡<sup>(注2)</sup>で出土した木簡に「(略)竹田里六人部…」とあり、現竹田は六人部の西隣であることから強い関係が窺われる。『吾妻鏡』などによると、寿永3(1184)年には領家であった平頼盛が、平家没官領であるこの地を安堵してもらうため、源頼朝に申し出て許可されたことが知られる。本家は八条院暲子内親王であった。本家の変遷は、八条院から春華門院、順徳天皇と受け継がれ、承久の変で幕府に没収された。その後、幾人かを経て大覚寺統に伝領された。そして、南北朝期になると武家方に接収され、天龍寺領となっている。

村名については嘉暦3(1328)年の史料があり、「丹波国六人部庄大内、宮村、生野三ヶ村分」とあり、これは現在の大字と一致する。

六人部荘域は、前項の文献史料から大内、宮、生野という地であったことが知られるが、これを現地名に当てはめると、中六人部が大内と宮、下六人部が生野となる。この他、上

六人部があるが、これは至徳4(1387)年の「宮村方三か村分」「高津方三か村分」「生野方三か村分」というのを、どこに比定するのかによって変わる。私は高津方三か村が上六人部を示しているのではないかと思う。

## 2. 六人部荘内での出土遺物(第1図)

六人部荘内で出土した古代末～中世の遺物は多数ある。特に、中六人部地域では大内城跡、山田墳墓群、宮遺跡、後正寺古墓、城ノ尾城館跡などがある。下六人部地域は多保市城跡、山田墳墓群、宮遺跡、城ノ尾城館跡などがある。下六人部地域は多保市城跡、上六人部地域は長田の上野墳墓がある。ここでは、紙幅の関係もあり、中六人部地域の12世紀～14世紀に属する出土遺物について概略を述べたい。なお、本稿で使用する原型とは、ある地域で生産されたその地域特有のもので、模倣型とは、他の地域の原型の影響を受けて生産された製品をいう。

### a. 出土遺物の分類<sup>(注3)</sup>



第1図 六人部荘内の遺跡と村落

- |          |              |         |
|----------|--------------|---------|
| A. 多保市城跡 | B. 宮遺跡・城ノ尾古墳 | C. 大内城跡 |
| D. 洞楽寺古墓 | E. 山田館跡      |         |
| 1. 高津    | 2. 観音寺       | 3. 長田   |
| 4. 岩間    | 5. 多保市       |         |
| 6. 宮     | 7. 岩崎        | 8. 大内   |
| 9. 田野    | 10. 生野       |         |
| 11. 堀越   | 12. 三俣       | 13. 池田  |
| 14. 正後寺  | 15. 上野       |         |
| 16. 萩原   |              |         |

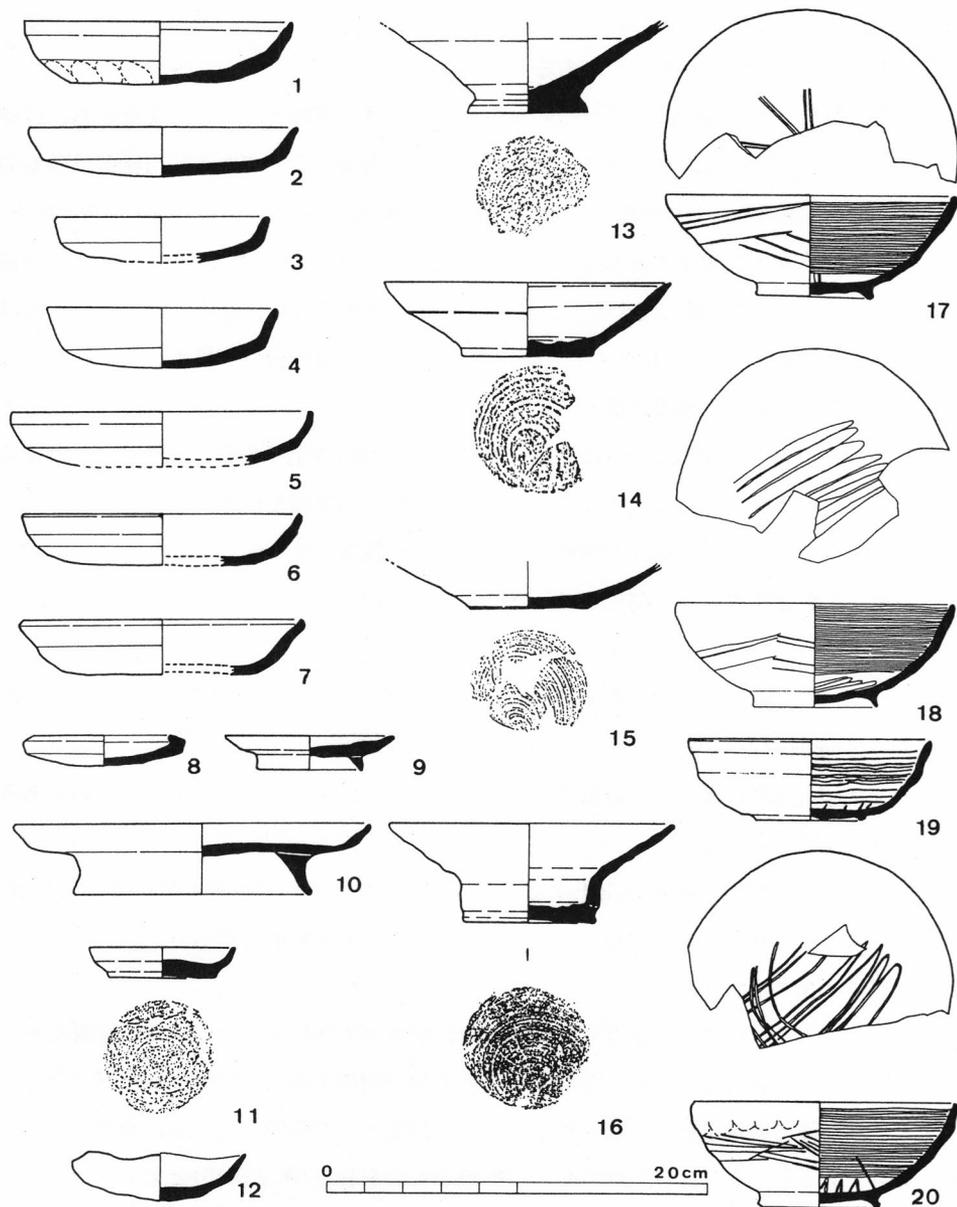
ここで出土した遺物の種類は、土師器皿・杯・鍋・壺、瓦器椀・皿・鍋・盤、須恵器鉢・壺・甕、丹波焼壺・甕・鉢、越前焼壺、中国製白磁椀・皿・香炉、中国製青磁椀・皿、中国製青白磁皿・壺・合子、中国製褐釉壺、石鍋、青銅製鏡、鉄刀などがある。

それでは、種類別に分類し、その説明をする。なおこれらの遺物は丹波原型(丹波地域で生産された丹波特有のもの)と、他地域原型(他地域で生産された他地域特有のもの)、他地域模倣型(他地域で生産されたものを模

倣したもの)、それ以外に分けることができる。これらの型式にAタイプから順に型式名を付け、焼成の同じものについては原型・模倣型・それ以外も通しにした。

土師器皿は7タイプに分けることができる。丹波原型は2タイプである。

丹波原型Aタイプ(第2図1)は、口縁部二段ナデで体部下半はユビオサエ、外底面は不調整、内面はナデにより仕上げる。口縁端部は尖るものである。洛外原型Aタイプに似る



第2図 各遺跡出土遺物実測図(1)

が、これに比べて厚手であることと、口径がやや小さい割に器高がやや高いという特徴がある。胎土はややくサリ礫を含むが良で、色調は黄褐色である。

丹波原型Bタイプは、口縁部一段ナデで、体部下半はユビオサエ、外底面は不調整である。内面はナデにより仕上げる。口縁端部は尖り、やや外反する。器壁は4mm程度である。これら、扁平で薄手のものがBaタイプ(第2図2)で、13世紀後半以降の厚手で、口径に対して器高がやや高いものをBbタイプ(第2図3・4)とする。胎土はくサリ礫を含むもので良で、色調は黄褐色である。

洛外模倣型はC・D・Eタイプがある。

洛外模倣型Cタイプ(第2図5)は洛外原型Abタイプの模倣型である。すなわち、口縁部二段ナデで体部下半はユビオサエ、底部は不調整、内面はナデである。口縁部は基本的には直線的で、端部のみやや内湾する。胎土はくサリ礫を含むが良で、色調は黄褐色である。

洛外模倣型Dタイプは洛外原型Jタイプの模倣型である。Daタイプ(Jaタイプの模倣型)(第2図6)は口縁部二段ナデで、端部は面取り気味である。他の部分の調整方法は同様である。Dbタイプ(Jbタイプの模倣型)(第2図7)は口縁部一段ナデで、端部は面取り気味である。胎土や色調は他と同じである。

洛外模倣型Eタイプ(第2図8)は洛外原型Cタイプの模倣型である。これは、いわゆるコースター型と呼ばれているものである。扁平で、短い口縁部を内側に折り曲げたものである。口縁部はヨコナデ、他は不調整である。胎土・色調は他と同じである。

この他、原型と模倣型との関係がはっきりしないものがある。これらはいずれも少量出土した。

Fタイプ(第2図9・10)は台付皿である。これは断面「ハ」の字状の脚台に皿(丹波原型Bタイプ)を付けたものである。てづくね成形である。

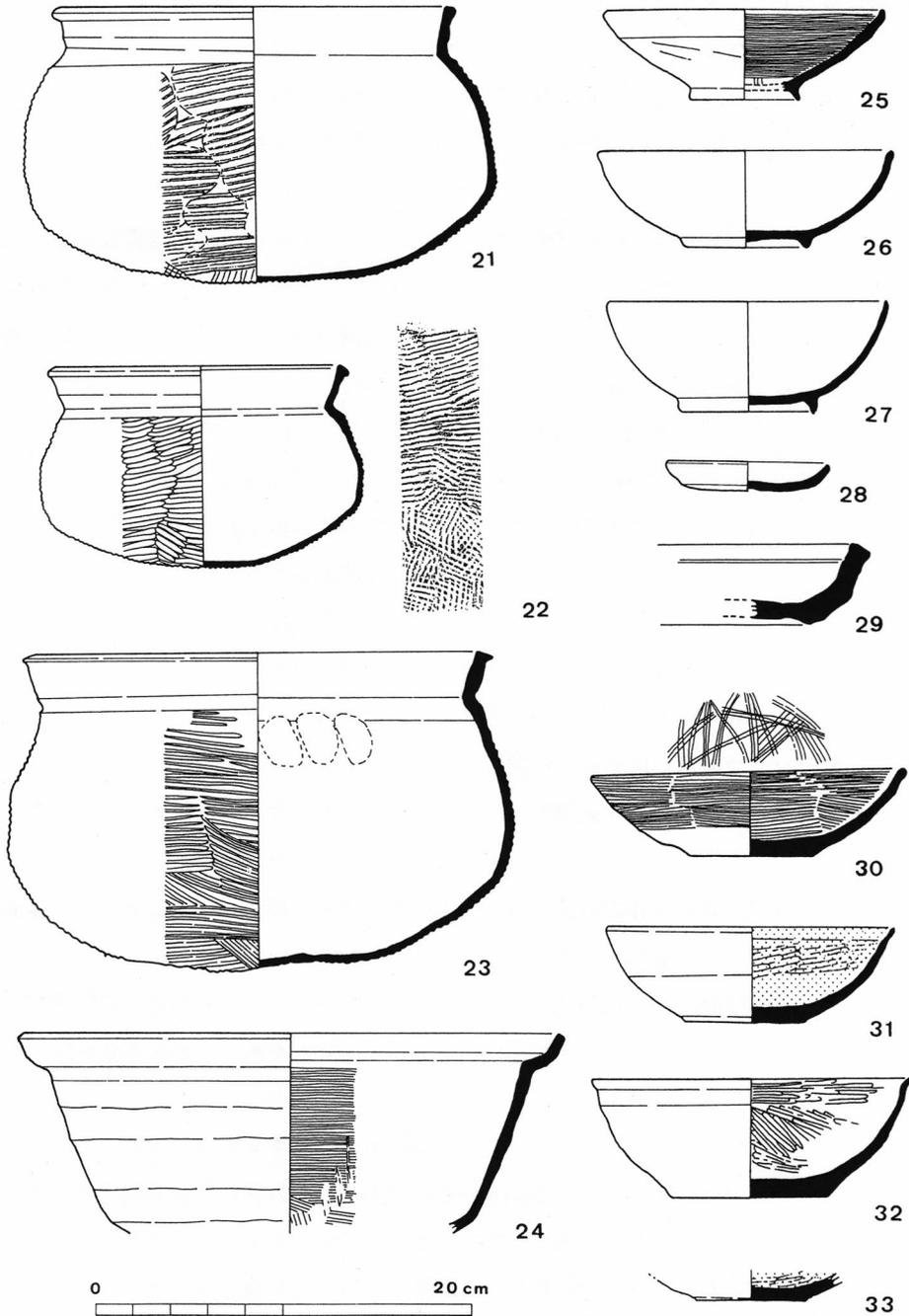
Gタイプ(第2図11)は糸きりの皿である。分厚い高台に短い口縁部をつけたものである。回転作用で成形している。

Hタイプ(第2図12)は墓地で出土するものである。てづくねで成形している。これは、まるで現地で作ったように歪みがひどく、薄手であることを特徴とする。

土師器杯は3タイプある。

土師器杯Aタイプは高台が糸きりで、外上方に張り出す体部をもつ。外形は深身である。成形は回転ナデを利用している。体部と底部との境が明瞭である(第2図13)。城ノ尾古墳Bタイプは丹後の黒色土器と同様な外形である。回転ナデで成形している。体部と底部の境が明瞭であるものをBa(第2図14)、不明瞭なものをBb(第2図15)とする。

Cタイプは直線的に張り出す体部と、薄い底部を特徴とする。丹波では類例が少なく、



第3図 各遺跡出土遺物実測図(2)

細かな分類については不明である(第2図16)。

土師器鍋には丹波・播磨原型のものと洛外模倣型のものがある。

丹波・播磨原型Aタイプは、偏球形の体部に、直線的な口縁部をつけたものである。体部外面は横方向のタタキで、内面はハケ目を施すようであるが、基本的には丁寧なナデである。口縁部の形の違いでAa～Acタイプに分けることができる。

Aaタイプ(第3図21)は口縁端部の外側が丸く肥厚するものである。

Abタイプ(第3図22)は口縁端部の外側が同様に肥厚するものの、三角形気味になるものである。

Acタイプ(第3図23)は口縁端部の外側が同様に肥厚するものの、口縁端部を強くヨコナデし平坦にした時、外側もヨコナデしたため、小さく三角形に肥厚したものである。

これらの胎土は赤い粒子を含むがおおむね良で、色調は黄褐色や橙褐色、まれに灰褐色もある。通常の土師器より硬質に焼き上がっているものが多い。

山城模倣型Bタイプは外開きの台形の体部に、「く」の字に屈曲する口縁部を付けたものである。体部外面は横方向のタタキを施し、内面はハケ目を施し、体部外面は口縁部ヨコナデ以外不調整である。口縁部の屈曲がほぼ中位であるものをBa(第3図24)、上が長いものをBbとするが、このタイプは六人部荘内では確認されていない。

瓦器碗は丹波原型A～Dタイプと楠葉模倣型Eタイプとに分けることができる。

丹波原型すべてに共通することは、口径に対して底径の占める比率が高く、40%を越える。また、体部が杯状で直線的なものが多く、口縁部が他の原型に比べてやや厚手のものが多い。胎土は良で色調は灰褐色、外面は黒色や灰黒色である。

丹波原型Aタイプは、体部が直線的に広がり、その上方、すなわち口縁部が垂直方向に屈曲するものである。

Aaタイプ(第2図17)は体部外面上半が横方向のミガキ、下半はユビオサエ、体部内面は横方向のミガキ、内底面はジグザグ暗文を施す。

Abタイプ(第2図18)は体部が丸みもちながら外上方に広がるもので、口縁部はやや外反する。外面のミガキはなく、内面にはAaタイプよりやや粗いミガキを横方向に施し、内底面にジグザグ状暗文を施す。

Acタイプ(第2図19)はAbタイプより更に口縁部が外反するものである。

丹波原型Bタイプ(第2図20)は体部が丸いものである。内外面には横方向のミガキを施し、内底面にはジグザグ状暗文を施す。稀に「米」状の暗文もある。Abタイプとの違いは、口縁部に施こされたヨコナデの範囲で、Bタイプは1cm程度、Abタイプは2cm程度である。

丹波原型Cタイプ(第3図25)は体部が直線的な杯状で、A・Bタイプに比べて浅手である。全体的に摩滅が激しく、調整は不明である。

丹波原型Dタイプ(第3図26)は体部が丸みもち、A・Bタイプに比べて浅手である。全体的に摩滅が激しく調整は不明である。

楠葉模倣型Eタイプはこんもりとした椀形である。第3図27の例は口径に対して底径の占める比率が高く、47.2%もある。楠葉原型瓦器椀は元来、口径に対して底径の占める割合が大きく、その意味では丹波型はその影響下にあるといえよう。大内城跡では、口縁端部内側の沈線はない。

瓦器皿(第3図28)は1タイプ(Aタイプ)で、土師器の丹波原型皿Aタイプとはほぼ同じ形をしている。

瓦器盤(第3図29)は大内城跡で1点確認された。口径46cmのものである。円盤状の底部からやや外開に体部が開くものである。口縁部はやや分厚くなる。

瓦器鍋は1タイプで、(Aタイプ)洛外模倣型土師器鍋Bタイプと同形である。口縁部の屈曲が中位のものをA a、上が長いものをA bとする。

黒色土器椀はA～Dタイプに分けることができる。いずれも内黒である。

Aタイプ(第3図30)は平高台で、体部は外上方に張り出す。高台は粘土円盤をそのままに残したものである。内外面とも密にヘラミガキを施している。成形は回転作用を利用している。

Bタイプ(第3図31)は平高台で、体部は外上方に張り出す。体部下半は丸みもち、底部と体部との境ははっきりしない。内面は横方向のミガキ、外面は不調整である。Cタイプ(第3図32)はBタイプと同様、体部と底部との境がはっきりしないものである。器高は高い。内外面に密なミガキを施す。口縁端部は外反する。

Dタイプ(第3図33)はCタイプより更に体部と底部との境がはっきりしないものである。また、体部の外反はCタイプより大きい。

須恵器は東播系のものがすべてである。器形には鉢・甕・壺がある。

丹波焼は甕・壺が14世紀になって使用される。

灰釉系のいわゆる山茶椀は皿が1点出土した。

常滑焼は甕・壺が少量出土するが、12世紀から13世紀にかけてのものである。

越前焼は壺を1点確認している。これは大内城跡墳墓で出土したもので、一般村落では確認していない。但し、14世紀以降の甕については丹波焼でないものが確実にあり、これが、越前焼もしくはこの影響をうけた近隣の製品である可能性は高い。

古瀬戸は灰釉おろし目皿・瓶子・仏花瓶がある。

中国製は青磁碗・皿、白磁碗・皿、青白磁小壺・合子、褐釉壺が出土した。

## b. 12世紀後半の遺物概要

### ①大内城跡

土師器皿は丹波原型A・Bタイプ、洛外模倣型C・Dタイプが出土し、これらが主流の型式である。他にE・Gタイプがある。Gタイプは墳墓特有のもので、歪みが激しく口縁端部が尖るものである。

土師器杯は出土しない。土師器鍋は洛外模倣型Baタイプである。

瓦器碗は丹波原型Aa・B・Cタイプが多く出土し、他に、楠葉模倣型Eタイプがある。また、瓦器皿Aタイプ、瓦器盤が少量ある。

黒色土器は出土しない。

須恵器は森田分類<sup>(注4)</sup>の第Ⅱ期第2段階の鉢(口縁部が三角形状に肥厚するタイプ)が主体である。また、第Ⅱ期第1段階に相当すると思われるが、口縁部の形状が第Ⅰ期第2段階の系統をひいて体部と同じ厚さで、端部のみが外側に突出するものもある。

常滑焼は壺が墳墓から出土している。口縁部は下半が直立し、上半が大きく外反するものである。口縁部の特徴からいえば中野編年<sup>(注5)</sup>では12世紀第4四半期(3型式)に相当する。甕は堀から出土している。中野編年では12世紀末から13世紀第1四半期(4型式)に相当する。

中国製は龍泉窯系青磁碗I-6b・I-2a、皿I-1b、同安窯系青磁碗I-1b・Ⅲ-1b、皿I-1b、福建省あたりの白磁碗Ⅳ・Ⅴ、皿Ⅷ-1b、青白磁小壺・合子・小碗などがある。

### ②宮遺跡

ここでは、宮遺跡・同墳墓と城ノ尾古墳石室内の資料を説明する。

土師器皿は丹波原型A・Bタイプが主体で、数点のみ洛外模倣型Cタイプがある。

土師器杯はA・Ba・Bb(城ノ尾古墳石室内)タイプがある。土師器鍋は丹波・播磨原型Aaタイプが少量ある。

瓦器碗は丹波原型Ab・Acタイプが主体で、楠葉模倣型はない。瓦器鍋は山城模倣型Aaタイプがある。

黒色土器碗はB・Dタイプがある。

須恵器は東播系の鉢ばかりである。森田分類の第3期第1段階(13世紀前半)がある。丹波焼・いわゆる山茶碗・常滑焼・越前焼などは出土しない。中国製陶磁器もない。

### ③多保市城跡

多保市城跡は台地上に位置する中世の城館である。この時期が城館かどうかは不明である。

土師器皿・杯はない。

須恵器は鉢がある。これは東播系のもので、森田分類の第3期第2段階(12世紀末～13世紀初め)に相当する。

白磁碗はⅣ類がある。

### c. 13世紀後半～14世紀の遺物概要

#### ①大内城跡

この時期の大内城跡は1棟の建物と、城の東北隅に設置された墳墓の資料のみである。土師器皿は丹波原型B b・Gタイプが出土している。土師器杯は出土しない。土師器鍋は丹波・播磨原型A b・A cタイプがある。これらは蔵骨器として使用されている。洛外模倣型は出土しない。土師器杯はない。

瓦器碗はA aタイプの最終段階のものがある。SB131出土。

須恵器は東播系に類似した鉢があり、森田分類では第Ⅲ期第2段階(14世紀前半)にほぼ相当する。これと丹波・播磨原型A cタイプが共伴し、蔵骨器の蓋と身として使用されている。また、四耳壺も出土している。

丹波焼は摺り鉢が出土し、これは前述の四耳壺と共伴し蔵骨壺の蓋と身として使用されている。

越前焼は壺の口縁部が出土した。

古瀬戸は仏花瓶・おろし目皿・灰釉瓶子が出土した。

中国製陶磁器は福建省あたりの褐釉壺が墳墓から出土した。

他の製品としては石鍋が出土した。木戸分類ではⅢ-C類に相当し、14世紀前半の年代が比定されている。

#### ②多保市城跡

土師器皿は丹波原型Bタイプが出土した。土師器鍋は丹波・播磨原型Bタイプが出土した。

瓦器碗は出土しない。

丹波焼摺り鉢が出土した。ヘラで一本ずつ刻んだものである。

中国製では龍泉窯系青磁碗が出土した。いわゆる雷文帯のものである。

#### ③宮遺跡

この段階は墳墓資料のみである。

土師器皿は丹波原型B bタイプのみである。他は出土しない。

#### ④山田館跡

基本的には墳墓資料である。

土師器皿はB bタイプが出土した。土師器鍋は丹波・播磨原型A bタイプが出土した。

丹波焼は甕の体部が「く」の字に屈曲し、短い口縁部がつくタイプである。

古瀬戸は灰釉の瓶子が出土した。藤沢分類<sup>(注7)</sup>では第Ⅳ期(14世紀中葉)に属する。これは蔵骨器として使用されたものである。口縁部を意図的に欠損させたものである。このような古瀬戸は京都市内ではほとんど出土しない。

中国製は龍泉窯系青磁杯Ⅲ-3 a類が出土した。

### 3. 原型・模倣型の視点からみた六人部荘内の遺物

前項で把握した内容をまとめると以下ようになる。

まず、12世紀後半から13世紀前半の状況を把握してみよう。

大内城跡では土師器皿は丹波原型と洛外模倣型がある。土師器鍋は山城模倣型である。瓦器椀は丹波原型と楠葉模倣型が出土した。須恵器は東播系そのもの、わたしの言い方であれば魚住原型の鉢が出土した。そのほか常滑焼、中国製などの原型が出土している。すなわち、丹波原型5型式、洛外模倣型4型式、他地域原型15型式、その他2型式である。

これに対して、宮遺跡では土師器皿は丹波原型が出土するものの、洛外模倣型はほとんど出土しない。土師器杯はA・B a・B bタイプがあり、これらの型式が主体である。瓦器椀は丹波原型A b・A cタイプが主体で、特にA cタイプは宮遺跡で主体的に出土するものである。瓦器鍋は山城模倣型であるが出土数はすくない。黒色土器は主体的に出土する。須恵器は東播系である。常滑焼は出土しない。中国製は白磁椀第Ⅳ類が出土するのみである。すなわち、丹波原型5型式、洛外模倣型2型式、他地域原型1型式である。

13世紀後半から14世紀をみると、大内城跡では土師器皿は丹波原型のみで、洛外模倣型は出土しない。ほとんど墳墓資料であるが、須恵器鉢・丹波焼鉢も土師器鍋もそれぞれの地域の原型がほとんどである。

この状況は他の遺跡でも同様である。但し、蔵骨器の身に使用された製品が大内城跡では他地域の原型が多いのに対して、山田館跡などでは丹波・播磨原型の鍋を使用しており現地調達であったことがしられる。

### 4. まとめ

今までの内容をまとめると、12世紀後半～13世紀前半の大内城跡では杯・皿のような供膳具や壺・甕などの貯蔵具、鍋や鉢などの調理具では、洛外模倣型と他地域の原型(中国南部と東播磨)で占める割合が多いことが指摘できる。これに対して宮遺跡では杯・皿のような供膳具は丹波原型の皿と、同じく土師器杯が主体であることが指摘できる。鍋は山城模倣型でこの段階にはまだ丹波・播磨原型が使用された形跡がない。

平安京(中世京都)の模倣型や、他地域の原型を多く使用していることは、経済的にも政治的にも、その地点が他地域と密接な関係があったことがわかる。

これに対して宮遺跡の場合は丹波原型を主体としており、他地域との関係はそれしか供給されない場合(須恵器鉢など)を別にすると希薄である。

13世紀後半から14世紀にかけては墳墓資料しかないが、その特徴をまとめると、大内城跡では土師器皿は墳墓特有のGタイプを使用し、蔵骨器は蓋と身ともに他地域の原型(丹波・播磨・中国南部)を使用している。これに対して山田館跡などは蔵骨器は丹波原型を使用しており、また蓋は使用しないなど、その差は歴然としている。1点のみ古瀬戸瓶子を蔵骨器として使用しているが、これは単独的でこの地の普遍的な出土状況ではない。

まとめると、12世紀後半～13世紀前半の大内城跡は、他地域の原型の保有率が圧倒的に高く、交流の深さが知られる。しかし、その実体は播磨と中国南部の陶磁器に限られ、供給地は限定されていたことが知られる。これが平安京という大都市との相違である。

13世紀後半から14世紀になると、新たに丹波焼が増えるが、あまり供給地は変わらない。洛外模倣型については大内城跡で多く、宮遺跡で若干あるが、他ではない。これは京都とのつながりの度合を示していると思う。また、中国製陶磁器についても同様である。すなわち、京都を中心とみた場合、大内城跡は密接につながっているが、他の遺跡はほとんど関連がなかったことが判明した。

(いの・ちかとみ=当センター調査第2課調査第1係長)

注1 伊野近富他『京都府遺跡調査報告書』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984

注2 加古千恵子『山垣遺跡』『兵庫県文化財調査報告書 第75冊』兵庫県教育委員会 1990

注3 辻本和美・岩松 保『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988

注4 森田 稔「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 1995

注5 中野晴久「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 1995

注6 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 1995

注7 藤沢良祐「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 1995

※なお、平安京・中世京都の洛外原型等は、拙稿「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 1995、および 拙稿「12～16世紀の京都の土器」「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」『中近世土器の基礎研究V』 日本中世土器研究会 1989 を参照されたい。

※第2・3図 注1・注3文献より引用。

